

その後数百人の党員が非法法から公然活動にうつる

全国鉄演劇サークル協議会結成

緑の会の歌「緑の仲間」発表会（新宿生活館）

▼作詩橋本弥・作曲木下航二（南部作詩作曲の会）

「まつの木」創刊（松の木会）

△区芝西久保巴町港印書内

△記英吉、安部明理ほか

△の木「フス発足（松の木会）」

△「ばばーハハ」(しばしばし編

△「内しば」

△「区芝浦」

△「文化」

△「池上新劇」(大田)

△「人公院」

△「鉄大」

△「三〇六」

1950年代における「東京南部」地域の広範なサークル文化運動の全体動向を把握できる唯一の本格的なツール。

サークル運動が、高度成長期にかけ運動としての力を失っていきながら城戸昇は、散逸するサークル雑誌の発掘・収集につとめていた。その文献収集という営みが50年以上の時を経て、本書に結実。

職場演劇・職場美術、音楽サークルや美術サークル、詩運動、うたごえ運動、松川救援運動との関わりにもふれ、文化史的にも重要な成果。



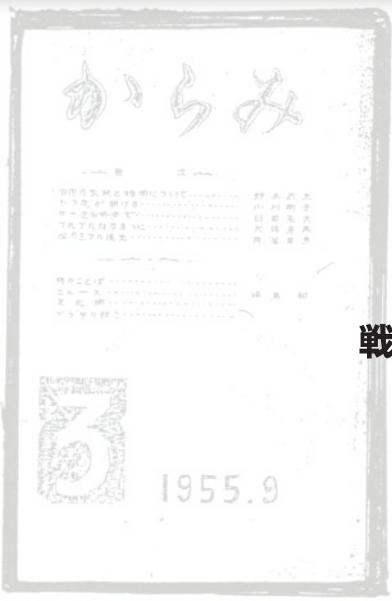
三〇六
鉄大
人公院
池上新劇
文化
区芝浦
内しば
まつの木
フス発足
ばばーハハ
区芝西久保巴町港印書内
記英吉、安部明理ほか
の木「フス発足（松の木会）」
「ばばーハハ」(しばしばし編
「内しば」
「区芝浦」
「文化」
「池上新劇」(大田)
「人公院」
「鉄大」
「三〇六」
協会京浜支部準備会
港区法政大学麻布校

書誌・出版史・書物メディア史のシリーズ *文圃文献類従59*

城戸昇—著 道場親信—編
池上善彦—解題 浅田石二・米谷匡史—推薦文

東京南部 サークル文化運動史 年表・記録

全二巻+別巻 [編集復刻版]



「からみ」からみの会(大王区入新井・中村省三)

関誌「塩分」の小関智弘と、小関は旋盤工として町工運動者作家で、一九八日新聞社刊)で第八回日本田浦地区「「祀る町」で芥直木賞の候補になっている。余談はさておき、こうして、そして考え、被告の無実を批判の運動となって、広津公正裁判要請運動を国民的力となった。
それを大規模な大衆的現地調査だけにとどめても、五七年七月二十日から八月十九日まで

戦後サークル雑誌について、そのサークル雑誌を出典とする【年表】
自らもサークル運動を担ってきた当事者による【記録】
サークル間相互の「交叉」のさまが伝わってくるその編集・記述

● 推薦文

『東京南部サークル文化運動史 年表・記録』の復刻に寄せて――

浅田 石二 (元下丸子詩人集団メンバー・詩人)

本書は、東京南部という一地域における文学サークルの運動を、年表形式にまとめた歴史的な記録である。もともとが、第二次大戦後の米軍占領下で「非合法」な反戦・平和・独立の運動を、文学サークル運動のかたちでスタートしたものであったから、当事者たちとしては、その運動のなかで自らの作品を残したりする意思も、また記録にして残すという行為も許されなかった。米軍占領下の時代における、一種の消耗活動でもあったからだ。そのような意思のもとに結集した活動であったから、とくに下丸子詩人集団時代の記録などは、すべてが闇から闇のなかへと消えてしまっているのも不思議ではない。

その文学的な活動の年表が、このたび復刻されるという。それが実現しえたのは、ひとえに運動仲間であった城戸昇の個人的な

努力によるものである。文学サークル運動が、高度経済成長期にかけて運動としての力を失い、勢いを失っていくときにあたって彼は、消えた資料を発掘する努力を積み重ねて年表の作成に尽力した。同時に、数十年を隔てて社会思想史研究としての立場から、1950年代の東京・南部というへき地での文学サークル運動に関心を示して、自身の命を懸けて発掘に取り組んでくださった一人の若い研究者がいた。故道場親信氏である。そして、この二人の活動に「火」を点けたのが、本書の解題を担当される池上善彦氏である。本書は、いまは亡き城戸・道場両氏と池上氏三人の献身的な努力によって世に出ることになった。故城戸昇、道場親信両氏の霊に感謝の思いを捧げたい。

● 推薦文

「詩のゲリラ活動」の痕跡を読む――

米谷 匡史 (東京外国語大学総合国際学研究院教授)

城戸昇氏は、非合法詩誌『石ツブテ』（民族解放東京南部文学戦線）の詩運動について、「詩のゲリラ活動」と呼んでいる。朝鮮戦争下に高揚したサークル文化運動は、独立と平和を掲げてレッドパージと戦争・占領に抵抗する。それは、共産党の文化工作によって触発された労働者・民衆の運動だが、やがてネットワークを形成しながら不定形に増殖する。ガリ刷りの詩誌は、ピラのように散布され、読み捨てられ、引用・転載を重ねながら拡がっていった。そこに立ち現れる人々の主体性・集団は、党や組織の統制をもこえて自己増殖した。詩による民衆蜂起、詩のインテリ

ファードである。このようなゲリラ活動は、記録として蓄積されず、資料は散逸しやすい。城戸昇氏は、投げ捨てられた石ツブテを拾い集め、痕跡をつなぎあわせ、丹念に記録していった。今回復刻される年表と記録は、個々の詩運動・表現をたがいに文脈づけながら読むことを可能にする。それを読みなおしながら、サークル文化運動の軌跡を現代に甦らせようとした道場親信氏も昨秋に亡くなった。だが、ゲリラ活動の痕跡を読みなおす営みもまた、不定形に増殖し、初発の意図をこえて甦り拡がっていくだろう。そのための道標となる貴重な復刻である。



〔1950年代後半〕の城戸昇

「城戸昇の著作は50年代そのものなのだ。民衆が政治家に、歴史家に、哲学者になることは困難なことであるが、詩人になることは出来る。それらをすべて兼ね備えた、主体になることは可能なのである。詩が証言であり、文学であり、政治であり、夢であり、歴史であり、それらのものが逆にそこから溢れ出る、今からは想像するのも困難な50年代の思考で書かれた貴重な資料であり、現在の戦後史に対する惰性的思考を揺さぶる衝動に満ちた書として、城戸昇の著作はある。」（解題より）



† 城戸 昇 「はじめに」――

敗戦後、日本のいたるところで、労働者、農民、学生たちのさまざまな出会いと出発があった。

彼らは、日本の進路が、戦争から平和へ、軍国主義から民主主義へ百八十度転換したため、何をどう対応してよいのか戸惑い、ためらいながらも、焦土の中から立ち上がって、新しい時代へのアプローチをはじめた。

飢えた胃袋は労働組合をつくって、「働けるだけ食わせろ！」と叫び、「食べるだけの賃金をよこせ！」と要求して、生きるためのたたかいははじめた。

満たされぬ心は、自ら詩を書き、小説を書き、絵を描き、楽器を奏で、歌をうたい、芝居づくりをして、自ら文化を創造するため、自由と民主主義の歌を高らかにうたいはじめた。

彼らにとって、自分の思いを、自分の言葉で、思いのまま語り、表現することは、未知の可能性への挑戦であり、自分を取り戻す人間解放への道でもあった。

彼らは、この時代をいかに生きるべきか、語らぬの輪をひろげ、学びの輪をひろげ、創造の翼をはばたかせ、激動する政治・社会の状況に鋭く反応しながら、仲間の輪をひろげ、自らの文化運動をおしすすめていった。

彼らは、それをサークル運動と呼んだ。運動のベルトは、サークル誌と呼ばれるガリ版雑誌であった。それは、乏しい金を出し合って自らの印刷工房を構え、夜のひととき、仕事疲れもいとわず集まり、互いに持てる能力を出し合い、あるものはガリを切り、あるものは刷り、あるものは製本してつくりあげた、手づくりの雑誌であった。

一つのサークルでつくられた部数は少なかったけれど、全国いたるところの職場・地域・学園でつくられ、その点と点が結びついて線となり、日本全国へサークル運動のネットワークをひろげていった。

† 井之川 巨 「五〇年代とはどんな時代だったか」――

一九五〇年代とはどんな時代だったのだろうか。連想ゲーム風に並べていくと、レッドパージ旋風、共産党分裂、朝鮮戦争、再軍備、日米安保条約、血のメーデー事件、火焰瓶事件、破防法反対闘争、砂川闘争一などの政治的にキナ臭いことばが次々と思い浮かぶ。もちろん世代による違いはあるだろうが、この時代に青年期・壮年期を送った人々にはほぼ共通したイメージがあるのではなかろうか。激動の時代だった。いつも後ろから前へ前へ突き動かされるようにして体を動かすのだが、くる日もくる日も腹を空かしていたように思う。

一九五〇年代のことである。

しかし、この時代のサークル運動は、前衛党の分裂と抗争のはざままで試行錯誤し、政治主義的偏向を批判され、六〇年安保闘争を前にほとんどのサークルが自壊し、サークル誌は散逸し、活動の記憶は風化していった。

その風化は、六〇年安保闘争の敗北以後、反体制運動の分裂・抗争の中で、戦後サークル運動のというより、戦後の反体制運動全体の断層となってしまった。

そこで、反体制運動の五〇年代の断層を埋めるためにはじめたのが、この記録のまとめである。しかし、この時代を語るにはあまりにも資料は乏しい。まして、この時代の証言を得るには、この時代を生きぬき、現在もそれぞれの立場で活動をしている人々の思惑や、利害得失を考えると、率直に語ってもらうことはかなりの困難がともなう。そんなことでこの記録は、五〇年代の空白を埋めるには、まだまだかなりの時間と、多くの人々の協力が必要とする虫喰いの記録である。

それに、この記録は、ぼく自身やぼくの仲間が東京南部のサークル運動にかかわり、あるいは政治活動にかかわって試行錯誤した軌跡を反映したもので、当時のたたかいを論断するほどの力はないし、そこから〈歴史と教訓〉をひきだそうという大それたものでもない。

詩と状況といういくらか目先のかわった構成で、激動の五〇年代を再現し、同時代を生きた人々には、風化した記憶をよみがえらすための一助として、いくらかでも役に立てばよい。

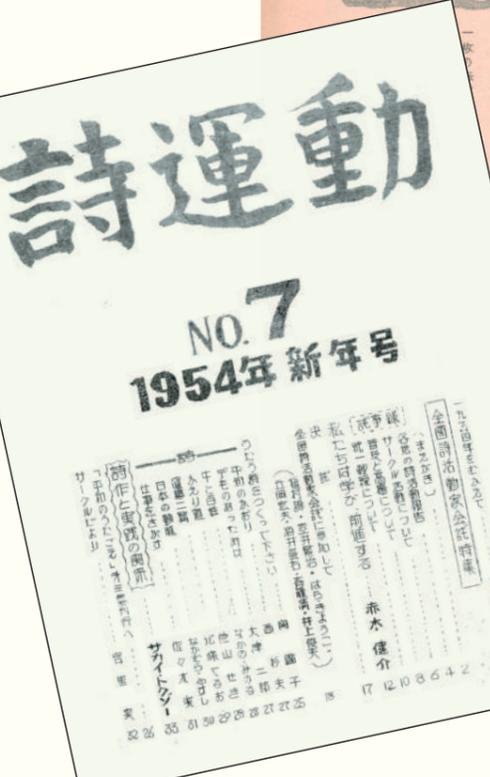
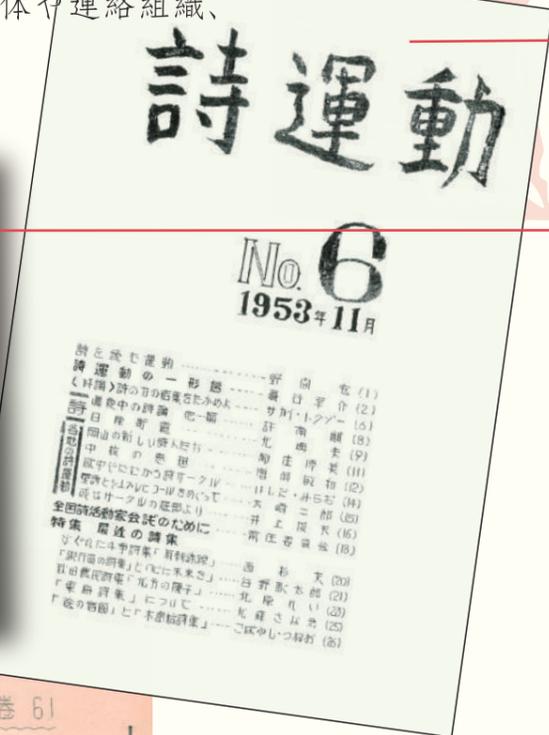
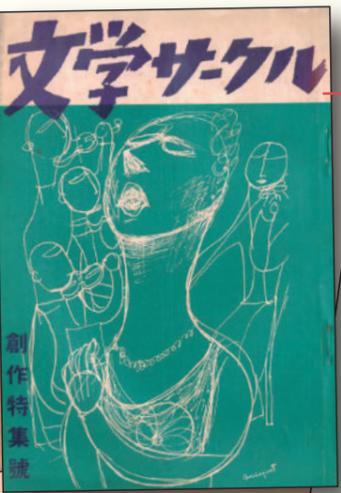
またこの時代を知らない人々には、こんなことがあったのかということを知ってもらうだけでもよい、そんないどでも、戦後史の断層を埋める手がかりになればよいと思っている。(抄録) (一九九二年五月) [本書第二巻収録]



第一巻 年表

- 『東京南部戦後サークル運動史年表』(眼の会、1992)
- 『戦後自立演劇運動史年表(戦後サークル運動史年表〈演劇編〉)』(1992)
- 附録資料
『南部作詞作曲の会と歌う詩創作運動(東京南部における1950年代サークル詩運動の記録)』(1986)

年表において多様なサークル誌の創刊年月日や
主な活動者の名前などが明らかに。
年表には東京南部に成立したさまざまな職場・地域サークル、
発行していたサークル誌、関わりがあった団体や連絡組織、
開かれたイベントなどが詳細に記録。



一九五〇(昭和二七年)

一 大倉重工業羽田工場で八人のレッド・パージ通告
二 石井鉄下蒲田工場で二四名のレッド・パージ通告
三 電業社(大田区統合)で一八名のレッド・パージ通告
四 同工場被解雇者の入館闘争
五 文壇団体約二〇〇人が蒲田署と第二方面予備隊約二二〇人と衝突、警官の発砲で被解雇者一名が負傷
六 占領目的阻害行為処罰令(政令三三三三号)公布
七 『人民文学』創刊(人民文学社)
八 『新日本文学』創刊(新日本文学会)
九 四年一月『文学の友』と改題、新日本文学会と統一
一〇 後、五五年一月『生活と文学』と改題
一一 『文学サークル』復刊(東京地方文学サークル協議会)
一二 『新日本文学』創刊(新日本文学会)
一三 『文学サークル』創刊(東京地方文学サークル協議会)
一四 『文学サークル』創刊(東京地方文学サークル協議会)
一五 『文学サークル』創刊(東京地方文学サークル協議会)
一六 『文学サークル』創刊(東京地方文学サークル協議会)
一七 『文学サークル』創刊(東京地方文学サークル協議会)
一八 『文学サークル』創刊(東京地方文学サークル協議会)
一九 『文学サークル』創刊(東京地方文学サークル協議会)
二〇 『文学サークル』創刊(東京地方文学サークル協議会)

一九五四(昭和二九年)

一 『詩運動』一月号
二 関鑑子が「詩に音楽の翼を」と題して「歌う詩」の創作
三 この呼かけに応えた南部文化集団の江島寛が「歌える詩」
四 の試みとして「煙突の下で」を作詩して音楽センターに送
五 る(のちに同センターの木下航二が作曲)
六 『文学の友』二七号(『人民文学』改題、一日)
七 特集・松川事件
八 「真実は勝つ」広津和郎
九 「ありがとう!先生」宇野・広津岡
一〇 氏によせて「佐藤」
一一 「黙ってはいられない」すぎき・はるえ
一二 「客観主義の陥穽——『週刊朝日』の松川記事について」
一三 佐々木基一
一四 『ありのさ』九号(ありのさ社)
一五 小田切清光退会したあと一年後に再建
一六 発行所を品川区金子町五八三七・仙田茂治方に変更
一七 石川進造、石川健二、住川忠義、仙田茂治、棚村洋祐、
一八 津布久晃司、山中善生
一九 二重橋事件
二〇 皇居参賀の雑踏で死者一六人
二一 『ありのさ』九号(詩人目黒六・住川忠義)

一九五九(昭和三四)年

一 『播種文学』二七号(播種文学同人会)
二 『新日本文学』一四九号(新日本文学会)
三 『詩脈』創刊(詩脈同人会)
四 『まっかわ』創刊(松川事件対策委員会)
五 音楽センター定期演奏会がはじまる

サークル人によるサークル雑誌を用いたサークル運動史へのツール サークル運動研究をさらにひらく

一 国会請願のデモ隊約二万人が国会構内に入る
二 『南風』四四号(日本文学協会京浜支部)
三 日本文学協会京浜支部一月例会(世田谷区五川原
四 笠原保雄宅)
五 野上弥生子「迷路」第二回
六 笠原保雄(報告者)、染谷孝哉ほか
七 緑の会大岡山支部例会(『人生手帳』二月号自評)
八 『国民文化』七号(国民文化会誌)
九 「第四回国民文化全国集分科会報告から」
一〇 『月刊大井詩人』創刊・通算五号(国鉄大井工場)
一一 五号から月刊となる
一二 小林津衛門(津代治・
一三 元京浜線の会会員)、加
一四 藤謙治、山崎重藤、内田
一五 勝将、津留崎新一、勝又
一六 治郎、浅沼利直、後藤一
一七 安、稲葉嘉和、中村紀代士、高野力一
一八 一九六二年一〇月発行四〇号で終刊
一九 後継誌『π』一九六二年一月創刊・通算四一号(七〇
二〇 年五月算八〇号で終刊)

一九五九(昭和三四)年

一 『新生』二号(大
二 『全電通詩集』一
三 『断片的な感想(『
四 『英雄的なプロレ
五 『ジャーナリズム
六 『読む労働者か
七 一九五九年日本の
八 日程
九 四日、コンクール
一〇 五日、創作発表会
一一 五日、大音楽祭(一
一二 松川事件対策協
一三 佳作一席、松川を

忘却と歴史の書き換えに抗して自分
たちの活動の記録を残し、その意味
を発信し続けてきたその成果。

ここでは城戸昇という「在野」の研究者、すなわち1950年代当時の活動
者自身によって手をつけられ、進められ、「東京南部サークル運動史」
が描き出される。
この営みがゼロ年代(2000年代)以降のサークル文化運動研究興隆の重
厚な前提のひとつとなる。